

2 / 2

2005(平成17)年10月27日鑑賞(東映試写室)

★★



監督・脚本＝伊藤秀裕／原作＝中島みゆき／出演＝瀬戸朝香／渡部篤郎／高島礼子（ティ・ジョイ配給／2005年日本映画／105分）

……中島みゆきの原作と音楽劇『夜会』を基に映画化したものだが、「二重人格」や「もう1人の自分」というテーマは、ステージでの音楽劇の構成には十分だが、映画のテーマとしてはあまりにも単純……？ 双子の姉妹と溺死した妹の記憶という設定も単純すぎるもの……。さらに、舞台の70%がベトナムだが、なぜベトナムなのかもさっぱりわからない。途中、アクビしながら観ていたためか、「感動のラストシーン」も今ひとつ……。こりゃ、明らかな失敗作では……？

中島みゆきの原作と『夜会』

中島みゆきは大好きな歌手だが、1995年の初演から10年間も続いている有名な音楽劇『夜会』は1度も観たことがない。また中島みゆきが書いたという、この原作本も読んでいない。この映画は、この中島みゆきの小説と音楽劇である『夜会』をモチーフとしながら、伊藤秀裕監督が独自の視点と解釈で製作した作品とのことだ。

中島みゆきが自分の小説と『夜会』でテーマとしたのは、1人の人間の内にある「二重性」あるいは「もう1人の自分」という比較的ポピュラーなもの……？ ステージで音楽劇を観客に披露するにあたっては、何らかの統一的概念のもとにやった方が観客の集中力が高まるし、そもそも『夜会』というのは、そういう狙いのもとで、中島みゆきの感性を生かしたことによって成功してきたもの。多分、小説もそうなのだろう。

しかし映画となると、そんな単純なテーマだけで、2時間も観客を引きつける

ことはちょっとしんどいのでは……？

この映画のヒロインは？

この映画で「二重人格」「もう1人の自分」という難しい役どころのヒロイン上田莉花を演ずるのは瀬戸朝香。莉花は出版社の編集部員だが、ある時、あるきっかけによって人気イラストレーターの矢沢圭（渡部篤郎）のアトリエを訪れたのだが、その瞬間から、突如「もう1人の自分」が動き始めることに……。そのため彼女はさまざまな妄想に悩まされ、不可解な出来事に出会い、そして自分自身を傷つけることに……。そんな中、莉花が選んだ行動は……？

もう1人の主人公は？

不可解な現象は圭にも。すなわち、圭も莉花と出会い愛を交わした瞬間から、それまで悩んでいた左手の痙攣が治まってきたのだ。これは一体なぜ……？

そこで、高島礼子扮する精神医のドクター富岡の登場となるのだが、そこで彼女が答える回答は難しい学問的な内容なのだが、ある意味きわめて当然のこと……？ だって、「2人の出会いによって、突然何らかの変化が現れたのかもしれないですね……」って、当たり前では……？

出会いは安易すぎるのでは……？

圭は人気イラストレーターながら（だから？）かなり気難しい性格で、出版社としては気を遣わなければならない存在。したがって、圭が描いたイラストの原画を雨の中、道路に落として車にひかれ目茶苦茶にってしまったとしたら、そりゃ大変。なぜ、莉花がそのお詫びに行くのかもよくわからないが、莉花がお詫びに行くといとも簡単に圭が許してしまうのも不可解。そのうえ、許す代わりに「モデルになってもらいたい」という流れになろうとは……？ そのうえ、そのイラストが完成した後、圭が莉花に贈ったのは真っ赤なドレス……。こりゃちょっと非常識では……？ これでは莉花の同僚の女性社員が嫉妬するのも当然……。

そんな2人は、その後莉花が仕事の進行状況を報告するために圭のアトリエを訪れて行く中、ごく自然に結ばれることに。しかしこれも、あまりに安易すぎ

なぜ莉花はベトナムへ旅立ったのか、それが私にはさっぱりわからないことは前述のとおり。そこであらためて思い出したのは、昔私が大学生の頃よく言われていた、「必然性」という言葉。これはとりわけ清純派女優がスクリーン上でヌードになるについて、「ただ単に裸を売りモノにするのはイヤだが、物語の展開上の必然性があれば……」という論調でよく使われていた言葉。しかして、この映画において、なぜベトナムなのかという必然性は……？

高島礼子もやりにくかったのでは……？

高島礼子は、『極妻』から『釣りバカ』まで何でもこなす女優だが、あのテレビドラマ『女系家族』において、ヒロイン米倉涼子をいじめる長女ぶりは記憶に新しいところ……。

そんな高島礼子が、この映画では精神科医に扮し、莉花との恋そして莉花との不可思議な因縁に悩む矢沢圭の心のアドバイザーとなっている。実際の精神科での治療はこんなイメージではないと思うのだが、この映画では高島礼子扮する女医さんは、知的かつ冷静であるうえきわめてファッショナブル……。しかしその口から出てくるセリフは、当然ながら専門用語のオンパレード。高島礼子がどこまでホントに理解できているのかわからないが、こんな専門職の役柄は、『極妻』以上にやりにくかったのでは……？

総評……

以上のとおり、この映画に関しては、私の評価は厳しいものにならざるをえない。その根本的要因は、やはりそのテーマが音楽劇やちょっとした小説のテーマとしては面白いけれども、2時間の長編映画のテーマとしては不十分だということ。あるいは、こんなテーマで本当に映画を製作するには、念入りの構成と脚本の準備が必要で、そうでなければベトナムの観光映画のような中途半端なものになってしまうことに……。伊藤秀裕監督や企画プロデューサーの北側司氏らは、こんな私の批判をどのように受け止めるだろうか……？

2005(平成17)年10月28日記